

真駒内養護学校にきて、思うこと

自立活動教諭（言語） 皆川 悦子

真駒内養護学校へ着任して1年4ヶ月が経とうとしています。コドモックル（北海道立子ども総合医療・療育センター）からの異動という異色の私を受け入れてくださった児童生徒の皆さんをはじめ、保護者の皆様、諸先生達にも感謝をしながらの1年でした。この間、いろいろな行事と一緒に過ごせたことも嬉しかったのですが、何より嬉しかったことは、日々の日常場面を児童生徒の皆さんと共有できたことでした。「特別」なことばかりではない普段の生活、日々の何気ないやりとりや取り組みに、大切なことは存在していると感じています。

学習場面や給食場で、児童生徒の皆さん一人ひとりの力が十分に発揮できるよう、担任の先生と協力して指導すること、これらに毎日取りくんでいます。先日も、S先生の学級の二人が、給食場で大きな成長をした嬉しい場面に出会えました。咀嚼やコップ飲みが上手になっており、そのこと自体もちろん嬉しいことでした。ですが、それより何より嬉しかったことは、その子の周囲の人との関わりや訴える力が、目線や表情の変化が、著しい成長を遂げていたことでした。周りの大人との関係を期待したり、働きかけたり、好きな友達が出来たり……と、どちらかという自分の内側に関心が向きがちであった子が、外界へ意識をクリアに向けて、自ら働きかけて、喜んだり時に嫌がったりする気持ちを表現していることでした。ご本人の成長する力に加え、ご家庭、担任の先生はじめ学年、学部の先生、寄宿の先生達の、日常という地味ながらも丁寧な手と、目と、気持ちと取り組みとが積み重なって成果に繋がったと思いました。この子の伸びた力は、上手に食べられる、ということだけではなく、社会で人と一緒に生きていく力であると思い、幼少からその子に出会ってはいましたが、「毎日」「日常」の底力を目の当たりにした出来事でした。

日々の関わりの中でよく思うことが、「子どもをよく観る」とこと、「子どもの視線の先を見る＝子どもの観ているもの、興味の向いているものを見る」ことの双方が大切ではないかな、ということです。子どもの気持ちはどこにあるのかな、どんな風に感じているのかな、と。互いを見つめる関係が出来てからではありますが、子どもが自ら先に進む力を持つには、子の観ている方向へ、関わる大人も視線を向けて、時には一緒にそちらの方向へ駆動してみたいと思っています。子どもたちは、表情で、声で、目線で、行動で伝えています。それらをすべてひっくるめて「ことば」と呼び、大人が感受し、応じられたら「つたわって」「やりとり」となるのだと思っています。

そのようなことを感じ考えながら、「食べる」や「ことば」に関しての指導を担当の先生と協力して行っています。何か聞いてみたいこと等（育児話なども大歓迎）ありましたら、気軽にお声をかけてくださると嬉しいです。